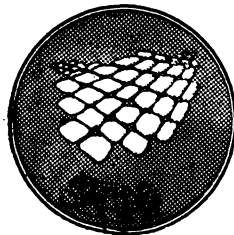


**宣伝** 最近気象台は予算が少なくて困るとか、予算のとり方が下手だとか盛んにいわれている。そしてその原因としては主脳部の無政治力や政治家の無理解などがいつも唯一のいい訳けのように持ちだされる。

これらが大きな原因の一つであることを否定するものではないがその他にもっと重要な原因があると思う。それは気象関係者の宣伝力の不足である。宣伝力が足りないなどという謙虚なる気象台の諸先生方からは叱られるかもしれないがこれは先生方の認識不足である。それは現在の主権者は極めて貧しいため納得できないことにはお金は出さないからである。現在天気予報が放送局からではなく気象台から出されていることを知っている人でも、その他のことは気象台が何をやっているのか、何をやろうとしているのかを知っている人は殆んどいないのが実状である。したがって気象関係者はどのような優秀な予報上、防災上の研究、調査が行われているか、あるいは予算不足のために埋もれているかを大いに宣伝しなければならぬ。またその宣伝は、主権者たる人々の理解できる言葉で話しかけるものでなければならぬ。数多くの研究、調査の報告雑誌も結構であるが、皆さんの優れた、そして有用な研究を大いに宣伝できる雑誌が一つくらい現われてもよいのではないかと思っている。その役割を“天気”に！(M.T.)

**忘却** およそこの世に腐敗という現象がなかったらどうなるか……というように学生時代に何かで読み、いろいろ夢想した経験がある。それと同じく、もし人間の生活に忘却ということがなかったらどうなるであろうか。常日頃、忘れっぽいので有名な筆者などには、そういう世の中は想像もつかない。今日も委員会があったのを忘れてしまっていた。手帳には書いてあったのだが、その手帳を見るのを忘れていたのだ。それからこんなことがよくある。朝、家では「今日はあそこは休みの日だ」と思っている、昼過ぎになるとすっかりそれを忘れ、そこまで足を運んで、しまったと気がつく。こういう個人的なアブノーマルな現象は別としても、腐敗も忘却も大いに天気と関係があることは知られている。しかし、その割に深い研究は少いようだ。誰か研究を進めていただくようお願いしたい。でもここに一つ心配がある。非常にある時期にその度がひどくなる人間と、それが集中する場所があることである。すなわち国会議事堂とその中の人々。選挙運動のときの公約を全く忘れてしまった人々。そして彼らがうろつくあたりである。今年の夏のように暑いと、その傾向はどうなるか。ジュネーブに集った人達とは、戦争に関する忘却についてどのように違った反応を示しているか。これは天気の問題ではありませんかネ。(No. 44)



気象台の会議では、よくこれは気象台の仕事であるとかないとか議論されることがある。気象台の仕事とは、どういふのかというと、天気予報と気象観測と、その他地球物理現象に関連したことが、だいたい範囲であると決められているようである。しかしいまの世の中では、ただ天気予報を出して、気象観測をしていれば、それだけで気象台の任務が全うされないことは、誰よりも実際に第一線で活躍している人ならば、いやというほど知らされている。

気象台は独善的に自分で自分の仕事の範囲を決めるような狭い考えはすてて、もろもろの産業や防災の面で、いやしくも気象に関連があることならば、積極的にこれを調査し、気象が100%その仕事に利用されるようにすることが必要だと思う。そのためには、いままでのように“人みしり”をしてはいけぬ。もっともっと実社会の中に飛び込んで、世間が気象台に何を望んでいるのかを知る必要がある。そしてもっと気象台以外のところにも気象の仕事を広めてゆかなければならぬ。気象の仕事は、もっと世の中に利用されてよいものであり、しかも立派にそれに応えるだけの材料も能力も気象台はもっている。いまのままでは問題の頭打が解消されないどころか、その内に共食いが始まって、自分で自分の首をしめるような結果になるだろう。(T.A.)

近頃十年史が流行っている。何々あれから十年とといったものをいろいろな出版物が入れている。確かにこれは面白いことではある。しかしその背後には面白いだけでは済まされぬ真剣な問題があると思う。多くの例を見るに、いろいろなトピックが雑然と羅列してあるだけで一向に進歩の跡が見えないのが殆どである。世の中のあらゆる事柄は進歩しているものであり、そこが人間の人間たるゆえんであり、退歩することは良いことではない。したがって進歩発展の過程として見えない限り、人類の進歩にも役立たないわけである。そこで何を次に進歩とするかを考えて見なければならぬ。このことはもちろん気象の世界についても考えられる。

気象学の発展は気象事業の発展に負うところが多く、気象事業の発展は気象学の発展に負っている。気象学と気象事業はもっと助け合わなければならないと思う。「気象あれから十年」を考えて見ると助け合うどころか反目した場合すらあるし、逆行的だといわれることもある。

将来の発展の目標を定め参考という見地でもう一度過ぎ去った出来事をあれこれと考え、進歩発展が如何に行われたかを振り返って見る必要がある。(O1)